010.2
〈図書館史〉

工部大学校書房の研究(2)

滝　沢　正　順

Library of Kobu-Dai-Gakko (Imperial College of Engineering, Tokei) (2) by Masanori Takizawa.

目　次

1．はじめに
2．工部大学校の資料
3．工部大学校について
4．書房について
　(以上　前々号)
5．書房の規則
6．書房の職員
7．蔵書と書籍目録
　(以下　次号)
8．帝国大学工科大学の書房
9．書房掛廃止以後の工科大学
10．その後の工部大学校校舎

5．書房の規則

『学課並諸規則』にのっている書房の規則をみてみよう。[78] これによって書房の運営の内容を知ることができる。すこし長くなるが，一例として，最後の規則である明治18年4月改正の規則のものを引用する。

第八章　書房

第一節　中央講堂ノ一部ヲ以テ書房トナシ場内書卓ヲ備ヘ以テ閲覧ノ便ニ供ス

第二節　書房ノ側ニ読書室ヲ設ケ新聞雑誌類ヲ備ヘテ教官及ヒ生徒ノ縦覧ニ供ス

第三節　書房掛ハ校長及ヒ教頭ノ指揮ニ従ヒ書房ヲ管理シ図書器物ヲ保管ス

第四節　書房ノ図書ハ其部類ヲ参考用教科用ノ二類ニ分ツ

第五節　本校課業ノ時間ハ常ニ書房ヲ開ク而シテ図書ノ出納ハ掛員出勤ノ時ヨリ退散時刻十分前迄トス

第六節　図書ヲ貸付スルニハ必ス簿冊ニ登記シテ散逸ナキヲ要ス

第七節　図書借用證書ハ書房ニ於テ定式ノ用紙ヲ受取リ式ノ如ク書名番号冊数官職姓名年月日等ヲ詳記シ捺印ノ上掛員ニ出スヘシ

第八節　掛員ノ外ハ一切書架ニ触ルヲ許サス

第九節　書房ノ図書ハ掛員ニ告ケテ掛員立合ノ上ニアラサレハ其出納ヲ許サス

第十節　生徒卒業ノ後ハ三日間ニ於テ悉皆借用ノ図書ヲ返却スヘシ

第十一節　書房ニ就テ図書ヲ借覧スルモノ閲覧ノ後ハ必ス掛員ニ返却スヘシ放棄スルヲ許サス

第十二節　書房ヨリ借受シタル図書ハ一切之ヲ他人ニ転貸スルヲ許サス

第十三節　書房ヨリ借受シタル図書ハ一切之ヲ他人ニ転貸スルヲ許サスト雖トモ生徒日課上ノ都合ニ依リ不得止場内ニ於テハ互ニ貸借スルヲ得ルヘシ然レトモ双方ヨリ其都度其事由ヲ掛員ニ通知スヘシ

第十四節　地図字典及ヒ貴重ノ図書雑誌類ノ未タ製本ナラサルモノ肉筆写本等ハ教官ノ授業用又ハ公用ノ外一切之ヲ書房外ニ出スヲ許サス

第十五節　書房ノ図書ヲ借受シタルモノ帰県又ハ旅行スルトキハ必ス借用ノ図書ヲ悉皆返納スヘシ

第十六節　書房ヨリ借受シタル図書ヲ紛失又ハ破損スルトキハ其借受人ヲシテ之ヲ修理セシムルカ或ハ同一ノモノヲ以テ償ハシム

第十七節　書房ヨリ借受シタル図書ヲ紛失シタルトキハ直ニ書房掛ニ届出ツヘシ掛員ハ其事由ヲ糺シ校長及教頭ニ上申スヘシ

第十八節　書房ニ於テ図書ノ紛失シタルトキハ掛員ヨリ其事由ヲ具シテ校長及ヒ教頭ニ届出ツヘシ

1988年3月12日受理
たきざわ　まさのり　東京大学工学部機械系三学科図書室

但紛失ト確認シ難キ場合ニ於テハ先ツ其旨ヲ届置キ六ケ月間捜索ノ後終ニ発見セサルトキハ更ニ本條ニ準シ紛失届ヲ出スヘシ

第十九節　掛員ハ書房ヲ整理保管スル為メニ規則ヲ議シ校長及ヒ教頭ノ認可ヲ得テ之ヲ執行スルヲ得ヘシ

第二十節　書房内ニ於テハ喫烟音読談論雑話等都テ他ノ閲覧者ノ妨碍トナルヘキ挙動ヲ禁ス

第二十一節　書房ノ規則ヲ犯ス者ハ掛員其姓名ト事由ヲ校長及ヒ教頭ニ具申シ以テ処分ヲ受クヘシ

第二十二節　生徒ハ教官ノ認可ヲ得タル證アルニ非レハ図書ノ借用ヲ許サス

第二十三節　科業用ノ図書ハ第一年生徒ニ十二冊第二年生徒ニ十六冊第三年生徒ニ十六冊第四年生徒ニ十冊第五年及ヒ第六年生徒ニ各五冊ヲ限リ借用スルヲ許ス若シ其制限外ニ於テ借用ヲ要スル場合ニ於テハ其事由ヲ校長及ヒ教頭ニ具状シ事実不得止ノ理由アルモノト認ムルトキハ其冊数ヲ増加スルヲ得ヘシ

第二十四節　預科生徒ハ参考用ノ図書一冊ヲ限リ借用スルヲ得ヘシ

第二十五節　専門科及ヒ実地科生徒府下ニ在テハ専門科生徒ハ一冊実地科生徒ハ二冊ヲ限リ参考用ノ図書ヲ借用スルヲ許ス府外ニ派出スルトキハ校長及ヒ教頭ノ認可ヲ得レハ参考用図書二冊教科用図書三冊ヲ借用スルヲ得ヘシ

但学術研究ノ為メ此科ノ生徒各地方ニ派出スルトキ同行ノモノナキ場合ニ於テハ時宜ニ依リ冊数ヲ増加借用スルヲ得ヘシ

第二十六節　本校卒業ノモノハ書房ニ就テ図書ノ借覧ヲ許ス若シ之ヲ書房外ニ提出セント欲スルモノハ校長及ヒ教頭ノ認可ヲ得ヘシ

但部数ハ二冊ヲ限リ日数二週間内ニ返却スヘシ

第二十七節　本省官員参考ノ為メ書房ニ就テ図書ノ借覧ヲ望ム者ハ先ツ入場券ヲ願ヒ出テ許可ヲ得テ之ヲ借用スルヲ得ルト雖トモ其所属局課長ノ照会ヲ経テ官姓名ヲ通知シ校長及ヒ教頭ノ認可ヲ得ヘシ而シテ図書ノ貸借手続ハ都テ書房ノ規則ニ拠リ掛員ノ指揮ニ従フヘシ

第二十八節　本校ノ官員ニシテ教官ニアラサルモノハ書房ノ図書二冊ヲ限リ借用スルヲ許ス但シ先ツ校長幹事或ハ教頭ノ允可ヲ受クヘシ

第二十九節　本省及ヒ本校ノ官員退職スルトキハ直ニ借用ノ図書ヲ返却スヘシ生徒退校ノトキモ亦タ同シ

第三十節　凡ソ書房ノ図書ヲ借受スルモノ使用済ノ上ハ直ニ返却スルヲ要ス又タ掛員ヨリ返納スヘキ旨ヲ通知スレハ直ニ返却スヘシ若シ延期ヲ要スル場合ニ於テハ書面ヲ以テ其旨ヲ掛員ニ申出ツヘシ

第三十一節　教官ハ参考用ノ為メ実際必要ノ図書ハ之ヲ借用スルヲ得ヘシ而シテ其部数ニ制限ナシト雖トモ掛員ヨリ他ニ有用ノ通知ヲ得レハ直ニ返却スヘシ

第三十二節　図書調査ノ為メ毎年二回書房ヲ閉鎖ス

三月ニ於テ四週間教科用図書ノ調査

表2『学課並諸規則』の書房の章

『工学寮学課並諸規則』		書房の章			『学課並諸規則』	
西暦	改正年月	掛の名称	章の場所	節(条)の数	全章数	全ページ数
1874	明治7年	図書科	(第13章)	全9条	(全17章)	(全56頁)
1875	明治8年6月改正	同	第13章	全10節	全21章	全69頁
1876	明治9年9月改正	同	(第14章)	全10節	(全22章)	全73頁
『工部大学校学課並諸規則』(工作局所属時代)						
1877	明治10年3月改正	同	第14章	全11節	全21章	全65頁
1878	明治11年12月改正	書房掛り	第14章	全16節	全22章	全48頁
1882	明治15年2月改正	同	第11章	全16節	全25章	全58頁
『工部大学校学課並諸規則』(工部省直轄時代)						
1883	明治16年8月改正	書房掛	第8章	全31節	全25章	全 127頁
1884	明治17年4月改正	同	第8章	全32節	全26章	全 163頁
1885	明治18年4月改正	同	第8章	全32節	全27章	全 174頁

六月ニ於テ二週間参考用図書ノ調査
故ニ此時ニ於テハ悉皆貸付ノ図書ヲ返納セシム

次に，各改正年の規則から書房の条文数などを示す（表2）。『学課並諸規則』は章に分かれ，章の中が節になって，条文が第1節から並んでいる。しかし明治7年のものだけは，節でなく条で，全ての条文が第1条から第79条まで通し番号になっている。第何章とはなっていないが，目次は章わけのようになっていて，本文も，新しい

表3『学課並諸規則』の書房規則の条文一覧

	条文の内容（明治18年）	工学寮			工部大学校（工作局所属）			工部大学校（工部省直轄）		
		1874	1875	1876	1877	1878	1882	1883	1884	1885
	明治	7年	8年	9年	10年	11年	15年	16年	17年	18年
1	書房の場所							1	1	1
2	読書室	62	6	6	7	11	11	2	2	2
3	書房掛の職掌	57	1	1	1	1	1	3	3	3
4	参考用図書と教科用図書				6	9	9	4	4	4
5	書房の開室時間							5	5	5
6	貸出の際の簿冊記入	60	4	4	4	4	4	6	6	6
7	図書借用証							7	7	7
8	書房掛員以外の書架接触禁止							8	8	8
9	書房掛員立ち会い以外の図書出納禁止	58	2	2	2	2	2	9	9	9
10	卒業時の借用図書返却							10	10	10
11	借覧図書の返却							11	11	11
12	借用図書の又貸し禁止							12	12	12
13	やむを得ない場合の又貸し							25	13	13
14	地図・字典・貴重図書・未製本雑誌・肉筆写本					10	10	13	14	14
15	帰省・旅行のさいの図書返却							14	15	15
16	借用図書の紛失・破損					14	14	15	16	16
17	借用図書紛失のさいの届出							16	17	17
18	書房内での図書紛失							17	18	18
19	書房規則の作成	65	10	10	11	16	16	18	19	19
20	喫煙・音読・雑談の禁止							19	20	20
21	規則違反者							20	21	21
22	生徒の図書借用のための教官の認可							22	22	22
23	生徒の科業用図書の借用冊数制限	61	(5)	(5)					23	23
24	予科生徒の参考用図書の借用冊数制限				(5)	5	5	23	24	24
25	専門科・実地科生徒の図書借用冊数					6, 7	6, 7	24	25	25
26	卒業生の図書の閲覧・借用							26	26	26
27	工部省官員の図書閲覧・借用	63	7	7	8	12	12	27	29	27
28	教官以外の工部大学校官員の図書借用		8	8	9	13	13	28	28	28
29	官員退職・生徒退校のさいの借用図書返却							29	30	29
30	借用図書の返却・借用期間の延長							30	31	30
31	教官の図書借用	59	3	3	3	3	3	21	27	31
32	図書点検のための書房閉鎖	64	9	9	10	15	15	31	32	32
33	休日中の図書借用		(5)	(5)	(5)	8	8			

明治8～10年の第5節（括弧内）は2ヵ所にある。

内容になった最初の条の欄の上に見出しをつけて条文の内容を区分するという形式をとっている。書房は第57条から65条までである。また明治9年の『学課並諸規則』は目次では第1章から第22章まであり，書房は第14章である。しかし本文では第4章となるべきところが第3章となり，(つまり第3章という章数が2回くりかえされ)，それ以後の章数は目次より1つずつ少ない数になっている。最後の章は第22章であるべきところが第21章になってしまっており，書房の章も第14章であるべきところが第13章になってしまっている。表2には目次の方の章数を記して括弧に入れた。

表2には一緒に書房の掛名も示した。前にも記したが，図書科，書房掛り，書房掛と変遷しているのがわかる。また条文が段々と増加し，第3期の工部省直轄時代にとくに多くなっている。それでは，その増加した部分はどのような内容であろうか。各改正年の条文の内容を表にして比較してみよう（表3)。

表3の条文内容の順番と語句は明治18年のものによっている。そして各年度の該当する節数（条数）を示してある。表2と表3でわかるように，書房の規則は，明治10年の前後と，そして明治15年と16年の間に比較的目立った変化を見せている。なお表3はあくまでも全体を一覧するためのものであり，細かい内容や語句は年度によって異なっているものがある。

語句の相違の一般的なものとしては，たとえば，表3の3番目「書房掛の職掌」とした条文のなかで，明治7～9年度では「寮長或ハ都検」であるものが，明治10～15年度は「局長或ハ都検」，明治16～18年度は「校長及ヒ教頭」である。表の28番目の，教官以外の官員の範囲は，明治8・9年度が工学寮の，明治10～15年度が工作局の，明治16～18年度が工部大学校の，それぞれ官員となっている。

また，明治16～18年度に参考用図書と教科用図書（または科業用図書）という名称で呼ばれているものは，すでに述べたように明治10～15年度では調査用図書と教授用図書である。これらの2種類の蔵書は“Calendar”では常に，General Library と Class Library（-ies）と記されている。『学課並諸規則』と“Calendar”には明治7～9年度はこの区分がみられないが，あとで述べる書籍目録の1876年(明治9年)には“Class Libraries”の区分がある。また，あとで金額を記す明治7年1月の「学校用品ノ購入」[79]の評議の，「文庫用書籍」「生徒用書籍」はこれに対応している。

条文のうち明治7年から常にあるものを列挙すると次のようになる。書房の掛員の職掌と規則の作成について。読書室のこと。掛員不在のさいの出納禁止。借覧のさいの簿冊記入。教員と官員への貸出。学生への貸出可能冊数（または室外貸出禁止)。そして図書点検のために，毎年，書房を一時閉室すること，である。

明治16年6月30日に制定され，7月1日以後施行された，教場簿記規定の第13条によれば，書房に備える帳簿は次のものである。[80]

書籍書留簿
書籍代與人名口別簿
書籍出納簿
書籍省減書留簿

条文にいう図書を貸すさいの簿冊は，この4つの中でいえば，2番目の貸与した人ごとの帳簿と，3番目の出納簿になるのだろう。

なお，書房の開室時間は“Calendar”には，平日は8時から4時まで，土曜は8時から正午までと記されている。

本の出納は掛員によらなければできなかったはずであるが，土木科の第1回卒業生の石橋絢彦の回想に「当時習ってゐたものは教科書としてウキリースのセリースや，ランキンの土圧公式迄も教へられたし，又ノートの授業もあった。学校中央の書房には之等の本があって各自とり出して室の隅で読んだ」[81]とあって学生が自分で本を書架から取り出したようにも思える。しかし「各自とり出して」というのは，各自が読みたい本をその都度（書房の職員を通して）出して読んだ，ということなのだろう。

学生は明治7年度には書房内でしか本が見られなかったが，書房の外へもだんだんと借り出せるようになる。おそらく蔵書数の増加がこの変化の理由だろう。貸出可能冊数の変化を表にしてみよう（表4)。表のなかの，冊数のうしろの括弧は条件や冊数増加について。冊数そのものが括弧に入っているのは，教員等の許可のあるときだけ借り出せるものである。本稿では「学生」といっているが，『学課並諸規則』ではすべて「生徒」となっているので，表のなかでは生徒にした。貸出可能冊数は，Class Library の方の明治17～18年の多さが目だっている。また，専門科・実地科の学生について，府内・府外・地方といういい方で，学校外への貸出が決められているのは，現場での実習が重視された工部大学校の教育課程と関連している。『工部大学校第2年報』の「地質学金石学及鉱山学教授ミルン申報」には，「茲ニ復タ勧告スルハ生徒巡見用ノ為メ各鉱山局ニ於テ書籍及ヒ器械若干ヲ備具セラレンコト是ナリ」[82]という文がみえる。

年度が下って学生が本を多く借りられるようになるの

表4　書房外への貸出可能冊数（学生）

		General Library	Class Library
第1期	明治7年	不可	
	明治8年	全員，　1冊（日曜のみ）	
	明治9年	8年と同じ	
第2期	明治10年	専門科生徒，1冊（自分の科の本のみ） 全員，　1冊（日曜のみ）	
	明治11年	予科生徒，　（1冊） 専門科生徒，（1冊（府内））、（2冊（府外））、 （3冊以内（教師の補助・製図・等）） 実地科生徒，2冊（地方へ独行のときは増加可） 全員，　1冊（常例の休日のみ）	
	明治15年	11年と同じ	
第3期	明治16年	予科生徒，　1冊（参考用図書のみ） 専門科生徒，1冊（府内）、（2冊（府外。独行のときは増加可）） 実地科生徒，2冊（府内）、（2冊（府外。独行のときは増加可））	専門科生徒，（3冊（府外。独行のときは増加可）） 実地科生徒，（3冊（府外。独行のときは増加可））
	明治17年	16年と同じ	第1年生徒，12冊（校長・教頭の許可で増加可） 第2年生徒，16冊（　同上　） 第3年生徒，16冊（　同上　） 第4年生徒，10冊（　同上　） 第5年生徒，5冊（　同上　） 第6年生徒，5冊（　同上　） 専門科生徒，（3冊（府外。独行のときは増加可）） 実地科生徒，（3冊（府外。独行のときは増加可））
	明治18年	17年と同じ	17年と同じ

にともなって，汚損や破損，そして紛失について条文にふれられるようになっている。

教官の図書借用では，明治7～15年は，教官でも「格別ノ免許」を得なければ一時に6冊以上の借覧はできなかった。しかし明治16～18年では教官は，「参考用ノ為メ」部数に制限なく借用できるとなる。しかし「他ニ有用ノ」通知を受けた場合はすぐに返却しなければならない。

工学寮・工部大学校の直接の関係者以外では，第2期は工作局の官員，また全期間を通じて工部省の官員が許可を得て閲覧・借用ができた。

本の閲覧・借用とはすこし事情が異なるが，博物場（7～9年は博物局）の陳列品は，生徒の「縦覧」「参観」と各科教官の授業用以外に，第2・3期は一般の見学ができることが『学課並諸規則』に記されている。10～15年の書き方は「博覧ニ供フ」，16～18年のは「世人ノ縦覧ヲ許ス」となっている。もっともこれは毎日というわけではなかったのかもしれない。明治11年3月8日の読売新聞の工部大学校についての記事は，博物場（文面では博物館）内部の陳列品について記し，開校式の日にちはまだ決まらないが，開校式が済めば博物場（博物館）は「毎月二三度づつは誰にでも見せられると聞きました」と述べている。[83] しかしこの点は東京大学でもある程度同様で，明治13年に落成[84]した理学部博物場は，明治14～15年には日曜日に一般に公開されていた。[85]

図書点検のための書房閉鎖は，明治7～15年は単に毎年3月中2週間閉鎖するとなっているだけだが，16～17年では毎年2回，教科用図書を3月下旬から4週間調査し，参考用図書を6月下旬から2週間調査するとなっている。18年では，引用したなかにあったように，「三月ニ

於テ四週間」「六月ニ於テ二週間」と若干の変化がみられる。書房を閉鎖し，貸出中の本をすべて返却させる理由について，16～18年は図書の「調査」といっているだけだが，7～15年は「書籍ヲ検査シ」「順序ヲ改整シテ遺失ヲ点検ス」るのだといっている。

そのほか付記すると，読書室の雑誌は，製本されると書房に移され，また，表3の14番目の書房外への持ち出し禁止の本のなかには，卒業生の Graduation Essay（卒業論文）がふくまれていると思われる。

6．書房の職員

『学課並諸規則』と“Calendar”によって書房の職員を表にしてみよう（表5）。

表5　書房の職員

	年度		Calender	学課並諸規則	人数	姓名
第1期	1873	明治6年	△			
	1874	明治7年		△		
	1875	明治8年		△		
	1876	明治9年	○	△	2	猪俣昌武・Kawashima Sutezo
第2期	1877	明治10年	○	△	2	同・同
	1878	明治11年	○	△	3	同・小松利済・Matsuoka Kaoru
	1879	明治12年	○		3	同・同・同
	1880	明治13年	○		3	同・同・同
	1881	明治14年	○		3	同・飯田善彦・小川玄次郎
	1882	明治15年		○	3	同・同・同
第3期	1883	明治16年	○	○	4	同・鈴木信・溝口善補・児玉済
	1884	明治17年	○	○	4	同・同・同・同
	1885	明治18年	○	○	4	同・同・同・同

各年度の“Calendar”と「学課並諸規則」の，○印は書房の職員名の記載あり，△印は記載なし，空白はその年度の“Calendar”「学課並諸規則」を未見であることを示す。
“Calendar”では明治9年（1876）のときだけ，猪俣がLibrarianで，Kawashimaが Assistant Librarian，明治10年（1877）以後は各年度とも全員がLibrarian である。

「規則」と同様に，工部大学校になった明治10年，そして，工作局から工部省直轄に変わった明治15年度と16年度の間に変動がある。そのときに職員の増員があり，同時に異動もあったことがわかる。職員のうち猪俣だけは異動がなくずっと書房の担当である。Kawashima と Matsuoka の姓名の漢字は不詳。小松のは「官員録」「職員録」[86]によった。表5に漢字で記した職員の“Calendar”での表示を参考までに示しておくと，Inomata Masatake, Komatsu Toshizumi, Iida Yoshihiko, Ogawa Genjiro, Sudzuki Makoto, Mizokuchi Yoshinobu, Kodama Watari である。

なお，明治8年に東京書籍館の館長補になり，のちに帝国大学の書記官になる永井久一郎が明治7年に工学寮に勤務していた[87]が，書房に関係したわけではないようである。

書房の職員のうち，猪俣昌武については，多少のことがわかる。まず曽禰達蔵の回想を引用しよう。

（猪俣昌武）氏は書房主任として明治七年濠上の建物の図書室係より本館成るの後は中堂の書房係主任となり十九年工部大学校が文部省の所管に移りて東京大学に併合となるまで終始一貫書房係の勤務に服して居た人であった。怜悧にして且緻密の人であって其の所管の図書能く整頓し，而して其の各科の書籍の種別名称を熟知したるは閲覧者の驚嘆する所であった。ダイヤー都検は特に其の才を愛し大に進展せしめんと欲し其の期満ちて正に帰国せんとするに際しては同行して渡英せんことを勧誘したと云ふことであった。[88]

また，『工部大学校第2年報』の「教頭ダイブルス申報」には次のようにある。

余ノ視察スル所ニ依レハ書房掛博物場及ヒ生徒館ノ吏員ハ孰レモ有倣ノモノニシテ就中當校ニ於テ久シク其職ニ在ル書房掛猪俣氏学生課荒尾氏ノ如キハ秀俊卓越ノ人ニシテ當校拝命ノ日ヨリ現今ニ至ルマテ終始相渝ラス孜々慇懃能ク其職務ヲ執リ尚モ怠ルコトアルコトナシ是レ余ノ最モ賞賛ニ堪ヘサル所ナリ[89]

猪俣はまた，工学会の会員（準員）になっている。明治16年7月改正の「工学会員姓名録」[90]には

麹町区中六番三十三番地　工部属　猪俣昌武

とある。この会員姓名録によれば，工学会の会員には客員・正員・準員があって，客員にはたとえば山尾庸三や大鳥圭介のように工部大学校に関連のある有力者の名がみえる。正員は工部大学校の卒業生，準員はいろいろのようであるが猪俣のほかにも工部大学校の職員で，さきの「教頭ダイブルス申報」に猪俣と並んで名の出ていた荒尾邦雄の名がある。[91]いずれにしろ猪俣が，工部大学校の学生や卒業生と深く関わっていたということができると思われる。

当時市販されていた毎年の「官員録」[92]をみると，猪俣は明治5年には工学寮に14等出仕となっている。等級はだんだん上がるが，明治18年は3等属になっている。属籍地ははじめ長崎で，途中一時静岡になり，ふたたび長崎にもどっている。『学課並諸規則』と“Calendar”をみると，明治14～18年度には書房の担当以外に教頭附書記

補（Assistant Secretary）[93]も兼任している。また“Calendar”には，各学年・各学期の試験と入学試験の試験問題が載っているが，1883～1885年度のには examiner の名も記載されている。それによると猪俣は明治16～18年度の入学試験の和文英訳の試験の examiner である。

明治19年に帝国大学になると，猪俣は工科大学の書記（判任3等）[94]ののち，文科大学の舎監になっている（明治20年12月から24年10月まで）。[95]

また猪俣は，文科大学舎監とともに帝国大学図書館管理補を兼任した。帝国大学図書館には館長はなく，明治30年に東京帝国大学附属図書館になったとき，はじめて図書館長の職制ができた。そしてそれまでは図書館管理が館長に相当していた。図書館管理は4人おり，猪俣の帝国大学図書館の歴史の上での時期がわかりやすくなると思うので，4人の名前と期間を示してみると[96]

木下広次（法科大学教授）
明治19年3月～22年10月
宮崎道三郎（法科大学教授）
明治22年10月～23年3月
田中稲城（文科大学教授）
明治23年3月～26年9月
和田万吉（文科大学助教授）
明治26年11月～30年6月

期間のうち，木下と和田については図書館管理心得の期間も含んでいる。和田万吉は引き続き館長になる。『帝国大学一覧』は「明治21／22年」に木下と並べて，「明治22／23年」に宮崎と並べて，図書館管理補・猪俣の名を記している[97]し，『東京帝国大学学術大観』の「附属図書館」の部分は，帝国大学図書館管理の名を並べたところ[98]で，木下・宮崎の間に猪俣の名も連ねている。また昭和17年の『図書館雑誌』に掲載されている波多野賢一「和田万吉先生伝」には，和田万吉の帝国大学図書館奉職（明治23年）当時の同館職員6名の姓名が記されている[99]が，管理田中稲城と管理補猪俣昌武の2人は，他の4人（書記）とは分けて，並べて書かれている。

猪俣が図書館管理補をしていた時期は，帝国大学図書館の建物建築の時期であり，明治22年9月11日に任命された4人の図書館新築設計委員のなかに教官以外では唯一加わっている。[100]同年10月14日に文部省に提出された，新築設計委員会の図書館についての案には，猪俣の作成した図書館（案）の図面が，別紙として添付されていた。[101]

『日本紳士録』（交詢社）の明治からの版をみてみると猪俣のその後のことがわかる。帝国大学を辞したのちは日本郵船が猪俣の勤務先になっている。最初の『日本紳士録』（明治22年）では[102]まだ文科大学舎監で住所は東京の本郷区だが，第2版（明治25年）では[103]日本郵船の横浜支店員，第3版（明治29年）では[104]同じく横浜倉庫員，以後，日本郵船株式会社員，そして単に会社員になって，第17版（大正2年）[105]を最後に猪俣昌武の名はなくなる。住まいは第2版以後ずっと神奈川県内になっている。

亡くなった時期は，『日本紳士録』から猪俣昌武の名が消えた頃と考えていいのではないかと思われる。昭和6年刊行の『旧工部大学校史料』の巻頭写真のなかの，猪俣旧蔵と思われる写真の所蔵者の名には猪俣本人の名がないし，上に引用した曽禰達蔵の回想文の前の部分は「斯く舊き職員を挙げ来り端なく想ひ起すは猪俣昌武氏である」[106]となっていて，すでに亡くなっているような述べ方である。

なお，日本郵船というと，お互いの関係は不明だが，先に名を出した永井久一郎は日本郵船の横浜支店長を明治33年2月から明治44年12月まで[107]していた。『日本紳士録』での猪俣の会社員というのは日本郵船のままのようなので，[108]永井久一郎と時期が重なることになる。猪俣と永井久一郎は工学寮・帝国大学・日本郵船と3度同じ勤め先にいたわけである。

すこし猪俣について深入りしすぎたかもしれないが，明治初期の図書館の実務担当者の経歴の一例としてみてみたつもりである。

ところで工部大学校では，学生の多くは士族であった。これは工部大学校にかぎらず，明治前期の高等教育機関全体にみられた現象と思われる。そして士族の比率は時代が下るにしたがって減り，かわって平民の比率が増してくる。

たとえば明治時代の法学士と医学士について大体の傾向をみると，[109]明治30年代前半を境にして，その前は士族の方が半ば以上を占めていることが多いが，その比率は全体として年が下るほど減っている。そして明治35年以降は士族が半分以上になることはなくなり，明治40年代には6～7割が平民で占められている。帝国大学の前の東京大学では，明治15～18年の医学士の約6割と，明治11～18年の法学士の7割をこえる者が士族である。

また，『大日本博士録　工学博士の部』によって，工学博士の学位登録順位第1位から第100位までの100人を調べると，士族74人，平民7人，不明19人であるという。[110]

そうした士族主体の学生たちの教育を支えていた，学校の職員（図書館ももちろん含めて）の族籍は，学生と比較してどうだったのだろうか。工部大学校について関

係する全員の族籍を知ることはできないので，ある時点でのある共通項による人たちの族籍をみるという形になる。

工部大学校について，まず学生の族籍の割合をみてみよう。明治18年12月末日の学生の現員153人の族籍と「百分比例」[111]では，(括弧内が「百分比例」)

士族　110人（71.90）

平民　43人（28.10）

明治16年度の学生206人の族籍と「百分比例」[112]では，

華族　2人（0.97余）

士族 154人（74.75余）

平民　50人（24.27余）

もうすこし年をさかのぼって，「明治11年4月私費入校生試験及第」26人では，華族1人，士族14人，平民11人であり，[113]「明治12年4月私費入校生徒試験及第」25人では，士族15人，平民10人である。[114]工部美術学校の場合もみてみると，明治10年7月1日から11年6月30日までの間に入校した10人（男9，女1）は華族1人，士族6人，平民3人であり，[115]明治11年7月1日から12年6月31日までの間に入校した13人（すべて男性）では華族1人，士族11人，平民1人である。[116]

また，明治12年11月にイギリス留学に派遣された11人の卒業生は，1人が平民であとの10人は士族である。[117]

族籍の出ている「職員録」[118]によって，書房の職員だった9人を調べてみると，掲載されている者，つまり族籍のわかるのは3人で，

平民　1人（猪俣）

士族　2人（小松，鈴木）

である。他の6人は傭だったのだろう。

傭については今は資料がないので，ここでは除くが，平民3分の1，士族3分の2という割合は，職員（教員に対する職員）全体でもだいたい同じである。工部省直轄時代の工部大学校でみてみよう。

明治17年9月改正の『工部省職員録』に出ている工部大学校の職員，1等属～10等属および御用掛（准判任）の23人は

士族　15人

平民　8人

明治18年10月改正の『工部省職員録』では，1等属～9等属および御用掛（准判任）の24人は

士族　16人

平民　8人

したがって職員全体の場合でも，書房の職員の場合でも，傭を除けば，いくらか士族の比率が低いとはいうものの，学生と同じような族籍の構成だったといえるように思われる。

比率については，工部大学校卒業生が主体の日本人教員をみると，職員の場合よりも士族の割合の低いことがある。上と同じ明治18年10月改正の『工部省職員録』では，教授・助教授の17人は

士族　10人

平民　7人

になっている。もっとも，明治17年9月改正のでは教授・御用掛（准奏任）・助教授の15人は

士族　10人

平民　5人

である。

いずれにしろ全体としていえば工部大学校では，士族主体の学生の教育を，同じように士族主体の職員（と日本人教員）が支えていたわけであり，書房の場合も（傭を別にすれば）基本的には同様であったといえるように思われる。

7．蔵書と書籍目録

服部撫松は『東京新繁昌記』のなかの「書肆」に「文華の明らかなる，今に於て盛なりと為し，……英書日に舶し佛籍月に渡り，支那獨逸又た相次ぐ。蟹行の書，蚯蟠の字，煥乎として皆其れ文章有り。[119]」などと書いているが，明治初期の教育機関では，海外とくに欧米からの書籍の購入はどのようにしておこなわれていたのだろうか。

『東京開成学校第3年報』(明治8年）によると同校でのこの年の洋書の購入は次のようであるという。

諸学科用ノ書籍ヲ准備セン為メ本年中横浜在留米国人ウェツトモール氏同国人ハルトリー氏英国人コツキング氏築地在留獨逸人ハーレンス氏及府下ニ在ル一二ノ書肆ニ命シ英佛獨米ノ各邦ニ注文スル者及ドクトル，モルレー氏米国ニ趣クニ際シ彼国ニ於テ購求ヲ委托スル者ト合テ二千二百九十八部ナリ[120]

工学寮・工部大学校でも，英書が中心だったことを別にすれば，基本的に相違があったとは思われない。現在東大機械系図書室にある工学寮・工部大学校の旧蔵書をみると，文中に最初に名のあった横浜の Wetmore のシールを表紙うらに貼ったものを見つけることができる(シールは“FROM / F.R.Wetmore & Co. / BOOK-SELLERS, &c. / Yokohama, Japan.”縦1.5cm×横2.8cm)。

『工部省第1回年報』(自明治8年7月至同9年6月）の「工学寮」のところにある「外国購買品」の項には，

「学校用書籍諸物品等外国ヨリ購買セシ者左ノ如シ」として，合計で英貨2195,0208の「外国購買品表」が出ている。しかし書き方は例えば，表からいくつか書き移してみると

		英貨
書籍	壱箱	5,1402
書籍	壱箱	12,0211
器械書籍	三箱	34,1907
器械書籍	四箱	51,1110

というふうで，書籍のみの英貨を計算することはできない。また工学寮・工部大学校の各年度の会計は，「工部大学校の資料」のところであげた(1)(2)(4)(5)の資料に出ているが，このどれにも書房のみの経費とか書籍購入費のみの合計金額といったものは載っていない。ただ(2)の『旧工部大学校史料』には，「学校用品ノ購入」として，工学寮で実際の教育が始まって間もない明治7年1月22日に，「学校用諸図籍器械類」を英国から購入するのに関し，工学助ほかが評議した都検ヘンリー・ダイヤーの計算書が載っていて，書籍関係として次の4件がある。[121]

一、拾八磅六ペンス　校中文庫用書籍之費
一、四拾貳磅八志　英語学生徒用書籍之費
一、参拾参磅拾貳志　幾何学生徒用書籍之費
一、貳拾四磅五志八片　究理学生徒用書籍之費

明治5年6月27日の「工学寮職制並事務章程」には，「其事ヲ処スルニ当リ卿輔ノ判決ヲ乞テ然ル後施行スヘキ条」の一つとして，「工学ニ関スル諸図籍器械等外国ヨリ購買スル事」があげられている。[122]

先の『東京開成学校第3年報』(明治8年)の文には，文部省学監D.マレーの帰国に際して洋書の購入を委託したことが出ていたが，御雇外国人が洋書の購入に関係した例としては，他にも例えば，東京大学理学部の教師として来日したE.S.モースが，招聘されて日本に来る前に東京大学のために，アメリカで2千5百冊（邦訳書の2万5千冊は誤りという）の本を集めたと，[123]のちに出版した『日本その日その日』(1917)に書いている。また，東京医学校の教師として来日し，引き続き東京大学医学部の教師になるE.ベルツは，日記の明治10年2月26日に横浜へ行ったことを記しているが，その用件は学校で必要な書物・器械などを注文と同時に支払えるようにするため手形を買ってくれるよう依頼されたためであると書いている。[124]工学寮・工部大学校の場合にも，そうした事例があったと考えても決して無理とはいえないのではないだろうか。

ところで工学寮・工部大学校書房の蔵書数であるが，明治8年以前には必要とされるほどには揃っていなかったようである。『工部省第1回年報』(自明治8年7月至同9年6月）の「工学寮」の「沿革の概略」には，明治8年のところに，「是年ニ及テ黌舎ノ建築概ネ落成シ書籍器具等署備リ各課ノ教場梢々整頓セリ唯大学校ノ工事未タ竣ラサルノミ」とある（大学校というのは本館の建物)。

表6　工部大学校書房蔵書数（冊数）

	洋書	和漢書	合計
明治10年	8,445	4,046	12,491
明治16年3月	12,380	6,726	19,106
明治17年3月	12,518	7,308	19,826
明治17年12月	14,200	7,789	21,989
明治18年12月	14,590	7,973	22,563

現在参照しうる資料でわかる蔵書冊数を表6に示す。明治10年は『数育新誌』27号と『教育雑誌』68号のもの。明治16・17年の3月は，『工部大学校第2年報』[125]に，明治17・18年の12月は「工部大学校年報」(明治18年）[126]によっている。

冊数の合計では，洋書は和漢書の約2倍のわけだが，部数の合計だとだいたい8倍からそれ以上になる。参考用図書と教科用図書それぞれについて，冊数・部数，洋書・和漢書に分けたのが表7である。

表7　工部大学校書房蔵書数の内訳（明治16～18年）

		洋書		和漢書		合計
		参考部	教科部	参考部	教科部	
明治16年3月	冊数	5,049	7,331	3,841	2,885	19,106
	部数	3,307	7,213	765	451	11,736
明治17年3月	冊数	5,168	7,350	4,339	2,969	19,826
	部数	3,397	7,232	841	457	11,927
明治17年12月	冊数	5,510	8,690	4,819	2,970	21,989
	部数	3,644	8,570	912	458	13,584
明治18年12月	冊数	5,809	8,781	5,003	2,970	22,563
	部数	3,814	8,661	987	458	13,920

書籍数には減少したものがあって，教科用図書の方が参考用図書より多く減っている。『工部大学校第2年報』によれば，

減省スル所ノ書ハ他所ヘ送付セルモノ及ビ生徒ヘ貸与中紛失ニ係リ代価ヲ以テ償却セシムルモノ損傷シテ廃書トナリシモノ等[127]

であるという。また，工部大学校では明治11年3月に，「生徒課業用ノ書籍拂下規則ヲ制定」[128]している。

さて，次に，工学寮・工部大学校書房の書籍目録について述べることにする。

『国立国会図書館所蔵明治期刊行図書目録　第5巻』（同館，昭和49年）によれば，現在国立国会図書館では，工学寮・工部大学校の書籍目録として，1876，1878，1880の各年のものおよび1876年11月の Supplementary Catalogue の計4冊を所蔵している。[129] ところで明治19年の『東京図書館洋書目録』と明治33年の『帝国図書館洋書目録文学及語学』をみると，[130] この4冊のほかにもう1冊，1879年の"Supplementary Catalogue of the Library"（『工部大学校書房書籍目録附録』）があったことになっている。しかし明治33年の『帝国図書館洋書目録』の時点ですでに請求記号が未記載になっている。

国立国会図書館所蔵のものはどれも製本されているので，大きさはもとより若干小さくなっていると思われる。明治19年の東京図書館と33年の帝国図書館の洋書目録ではどれも判は8°だが，末見の1879年の Supplementary Catalogue だけは12°になっている。

国立国会図書館所蔵本によって書籍目録について述べていこう。

表紙・標題紙の記載とページ数・大きさは次のようである。(斜線は記述の区切りを示すために加えたもの)。

1．"Library of Imperial College of Engineering, Tokei. / 1876."（表紙）
38p. 縦23.3cm×横17.0cm（あとから製本した時につけた外側の表紙の大きさは，縦23.7cm×横17.4cm）

2．"Library of the Imperial College of Engineering. / Supplementary Catalogue. November, 1876."（表紙？）
7p. 縦23.6cm×横16.8cm（あとから製本した時につけた外側の表紙の大きさは，縦23.9cm×横17.0cm）

3．"CATALOGUE OF BOOKS CONTAINED IN THE LIBRARY OF THE IMPERIAL COLLEGE OF ENGINEERING, (KOBU-DAI-GAKKO), TOKEI. / Tokei : Printed at the College. 1878."（標題紙？）
iv, 82p. 縦23.3cm×横15.9cm

4．"工部大学校書房書籍目録 / IMPERIAL COLLEGE OF ENGINEERING, (KOBU-DAI-GAKKO), TOKEI. / CATALOGUE OF BOOKS CONTAINED IN THE LIBRARY. 1880."（表紙）
"CATALOGUE OF BOOKS CONTAINED IN THE LIBRARY OF THE IMPERIAL COLLEGE OF ENGINEERING, (KOBU-DAI-GAKKO), TOKEI. / Tokei : Printed at the College. 1880."（標題紙）
iv, 108p. 縦22.8cm×横15.7cm

2は，あとから製本した時につけられた外側の表紙に，切って貼付されたものによる。3は今は表紙のように見えるが，たぶん標題紙ではないかと思われる。[131] なお，1と2には「教育博物館印」が，3と4には「東京図書館蔵書之印」が押されている。

書籍目録のうち，時間的に最後で，掲載された書籍数が最も多いと思われる1880年の目録を例としてまず述べ，その後に他の年のものについても簡単にふれることにする。

表8　1880年の書籍目録 Contents

CONTENTS.

The names of those books with an asterisk (*) are printed in more than one class.

1. Civil Engineering,
2. Mechanical Engineering,
3. Naval Architecture,
4. Telegraph Engineering (*including Electricity and Magnetism*),
5. Architecture,
6. Chemistry (*Works on Applied Chemistry will be found under "Arts and Manufactures."*),
7. Mining and Metallurgy,
8. Geology and Mineralogy,
9. Paleontology, Zoology, and Botany,
10. Physical and Political Geography (*including Meteorology*),
11. Arts and Manufactures,
12. Properties of Materials used in Construction,
13. Surveying,
14. Drawing,
15. General Treatises on Natural Philosophy, and Special Treatises on Light, Sound, and Heat,
16. Astronomy,
17. Theoretical and Applied Mechanics,
18. Mathematics,
19. Periodicals, Transactions, &c. (*Those periodicals which treat only of one subject are included under that subjct,*)
20. Graduation Essays : Imperial College of Engineering, Tokei,

21. Scientific Dictionaries,
22. Agriculture and Physiology,
23. Mental and Moral Philosophy, Political Economy, Law, and Education,
24. History, Biography, and Travels,
25. Poetry, Novels, and Essays,
26. Language,
27. Miscellaneous,
28. Class Library,
    Civil and Mechanical Engineering,
    Geology, Mineralogy, and Mining,
    Chemistry and Metallurgy,
    Natural Philosophy,
    Mathematics,
    Drawing,
    English,
29. Journals, Magazines, &c.,
30. Books lent to the Library by the Mining Department,
31. Books lent to the Library by Mr. Koma,
32. Japanese and Chinese Books:
    Civil and Mechanical Engineering,
    Architecture,
    Geology and Mining,
    Chemistry and Manufactures,
    Agriculture and Botany,
    Physics and Astronomy,
    Mathematics,
    History and Biography,
    Geography and Travels,
    Literature and Education,
    Political Science,
    Maps and Atlases,
    Dictionaries and Cyclopædias,
    Miscellaneous,
33. Class Books, Japanese and Chinese,

1880年の目録の contents を示してみよう（表8）。ただし項目順に番号をつけ，ページ数の記載は省略してある。

次に，『工部大学校第2年報』の「図書ノ事」にある，明治17年3月調の各部の書籍数の表[10]の「書籍科目」つまり分類項目名を次に示してみる。（斜線が「書籍科目」の区切り）。

洋書参考部書籍表

土木／機械／造船／電信工学（磁気電気書當科ニ入ル）／造家／化学（応用化学書ハ製造部ニ入ル）／鉱山，冶金／地質，金石／古生物，動物，植物／地理，気象／美術，製造／構造用物体強弱／測地／図学／物理／天文／重学／数学／記録（定時刊行書）／工部大学校卒業試論文／工芸字典／農業生理／心理，品行／歴史，伝記／詩歌，文章／語学書／雑書

洋書日科部書籍表

土木学，機械学／地質学，金石学，鉱山学／化学，冶金学／理学／数学／図学／英学

和漢書籍表

土木，機械／造家／地質，鉱山／化学，製造／農学，植物／物理，天文／数学／歴史，伝記／地理，紀行／文学，教育／政事／地図／字典／叢書／日科本

各表の「書籍科目」の順序は『工部大学校第2年報』のままである。そしてこの「書籍科目」は1880年の書籍目録の分類と対応している。項目名には若干対応しない点もあるが，各表内の分類項目の排列順序は同じで，両方は一致しているといってよさそうである。つまり，洋書参考部書籍表の「書籍科目」は表8の contents の1～27とほぼ一致し，洋書日科部書籍表の「書籍科目」は同じく28と，和漢書籍表の「書籍科目」は同じく32，33と，それぞれ一致している。これら各部の分類は工部大学校の第2期・第3期をほぼ通して使用されていたといえそうにも思われる。

さて，1880年の書籍目録の全体は，以上のことを念頭におくと，配列の順に次の6つの部分に分けられるといえるようである（用語は第2期のものにする）。

（1）調査用図書（洋書）
（2）教授用図書（洋書）
（3）読書室の雑誌等（1点を除きすべて洋雑誌）
（4）貸与された図書（鉱山局および Mr.Koma より。洋書）
（5）和漢書の調査用図書
（6）和漢書の教授用図書

表8の contents の番号でいえば，（1）が1～27，（2）が28，（3）が29，（4）が30，31，（5）が32，（6）が33である。

洋書は各項目ごとに，著者名のａｂｃ順にならんでいる。個々の図書の記載のしかたは，著者の姓・ダッシュ・書名となっており，1部が2巻以上のものや複本のあるものは書名のあとに括弧にいれて巻数と部数を記してある。書名は実際の図書と比較してみると，主要な部分だけ記してあとの語を省略したものが結構あるようである。

洋書の記載方法の例として，（1）の洋書の調査用図書の“Chemistry”（表8の6番目）に記されているものを1

つ示すと，

Miller-Elements of Chemistry. (3 vols. 2 cops.)

というふうである。

Contents のはじめに書かれている，重複して記載されている本につくアスタリスクは，洋書の調査用図書の部分だけにあり，著者名の前についている。その本が最初に出てくるときにはアスタリスクはなく，2度目以降に出てくるときにアスタリスクがついている。たとえば

Main and Brown-The Marine Steam Engine.

は"Mechanical Engineering"のところではアスタリスクはないが，"Naval Architecture"のところではついているというふうである。

雑誌で，製本されたものは，逐次刊行物のところ（表8の19番目の"Periodicals, Transactions, &c."）に記されている。原則として誌名のａｂｃ順に並んでおり，それぞれの雑誌等は，タイトル，所蔵年次，そして冊数を括弧にいれて，という順で書かれている。たとえば，

Nature ; May, 1873—Oct., 1879. (13vols.)

というふうである。大学の Calendar もここに記されている。例を日本の学校でいえば，東京開成学校の1876年の Calendar が2部，工学寮・工部大学校の Calendar も1873—1880.（6 vols.）となっている。またここには東京書籍館の目録なども入っている。

20番目の"Graduation Essays"は，工部大学校の1879年と1880年の卒業論文が，学科とは無関係にそれぞれの年別にタイトルのａｂｃ順にならんでいる。すべて英文。タイトルはテーマの部分だけ記されている。書き方はたとえば

Locomotive Engines. By Miyoshi Shinroku.

というふうになっている。タイトルは機械科の実際の論文[133]では，標題紙（学生のペン書き）には"Essay on～"のようになっているものが多いが，表紙（タイトルを印刷した工部大学校の用紙が貼付されている）はこの書籍目録と同じにテーマだけである。大きさは機械科の1879年のものによっていえば，縦33.7cm×横21.8cmである。

以上は洋書の調査用図書であるが，表8の番号でいえば，1～18がおもに工学およびそれに直接関連するものであり，19～21は主題以外による項目，22～27は工学との関連のうすいものということになる。

次が(2)の洋書の教授用図書。教授用図書が学生のテキストで複本が多いことは前にふれた。複本の部数は調査用図書では2部か3部が多いが，教授用図書では大部分がもっと多い。数十部とか中には百部をこえるものもいくつかある。部数がもっとも多いのは"Mathematics"のところにある

Wilson-Elementary Geometry. (340 cops.)

である。

(3)の読書室の雑誌等は32点ある。洋雑誌でない1点は，日本最初の工業雑誌である「工業新報」で，あとはすべて英語のもの。記載はタイトルだけで，年次・巻号はない。なお，「工業新報」には，工部大学校に在学していたときの高峰譲吉・志田林三郎・高山直質などが欧米の雑誌から翻訳をしていた。[134]

(4)の貸与された洋書のうち，鉱山局からのものは，複本があるものが多い。数十部あるものもいくつかあり，この点からは教授用図書と似たような印象を受ける。複本は Mr.Koma からのにもあるが，こちらは2部どまりである。Mr.Koma については，いまは確証はないが

1．多くの洋書を持つことのできた人物で

2．工学寮・工部大学校に本を貸与できる位置にいて

3．しかも Koma という姓をもつ人物

ということから，おそらく狛林之助ではないかと思われる。

狛について『明治過去帳・物故人名辞典』と『海を越えた日本人名事典』によると，[135]生年は不明，敦賀藩の士族で，明治2年に官費留学生としてイギリスに派遣されている。帰国して明治7年に鉱山寮に入り，明治16年には佐渡鉱山局長心得になっている。しかし翌17年に非職，18年に休職となり，明治44年に静岡県で没している。また『工部省沿革報告』の「鉱山」の部分(「釜石鉱山」「佐渡鉱山」)には狛の異動などが記されている。書籍目録の Mr.Koma 貸与の本には，工学以外のものもあるが，倉沢剛『幕末教育史の研究　3』(吉川弘文館，昭和61年)では，狛の留学は「英学」のためとなっている。[136]また同書によると狛がロンドンに留学したのは明治元年であり，[137]渡辺實『近代日本海外留学生史　上巻』(講談社，昭和52年）によると明治4年9月の時点でまだイギリスに留学中である。[138]

(5)(6)の和漢書の部分は，すべて日本文（漢文）とその英訳を併記してある。たとえば(5)の最初は，

和漢書籍目録

LIST OF JAPANESE AND CHINESE BOOKS.

となっている。もっとも，字の向きは，この書籍目録の綴じ目に対して，漢字は縦書きに，アルファベットは横に，と相違している。記載の例として

土木学機械学之部

CIVIL AND MECHANICAL ENGINEERING.

の最初のものを示すと，

工学必携　長嶺譲編輯　　一冊

Nagamine-Engineer's Hand-book.

というふうである。

(6)は

科業用書目

CLASS BOOKS.

となっているが，全部で9点しかなく，それも工学・工業に関係するのは『日本油田地質測量書』のみである。あとは英語に関するもの1点と水泳に関するもの1点で，残りは学課の「本朝学」のためのものと思われる『国史略』『日本外史』『文章軌範』『十八史略』といった書名が並んでいる。部数が一番多いのは

日本外史　頼襄著　　十二冊八十五部

Rai-Biographical History of Japan. (12 vols. 85 cops.)

である。

以上で1880年の書籍目録の説明を終え，他の年のものについて簡単に述べることにする。

1878年の書籍目録は，記載されている本の数は1880年より少ないようであるが（分類項目数もすこし少ない），全体の構成や記載の仕方はほぼ同じである。1880年の説明の(6)に当たる部分は，

本朝学課書籍目録

JAPANESE CLASS LIBRARY.

となっている。

1876年の書籍目録には，contents はないが，個々の本の記載の仕方は同じである。記載するための，分類項目の数は1878年より少なくなっている。全体の構成を述べると，はじめに General Library（この言葉はないが）の本が区分された項目ごとに記されている。そのあと Class Libraries がやはり項目ごとに記されているが，項目は Engineering, Chemistry, Natural Philosophy, Mathematics の4つしかない。もっとも，Mathematics の書名のあとに区切りの線を引いて辞書が1点だけ載せてあるので，正確には項目は5つである。Class libraries のあとに読書室の雑誌類，そのあと Mr. Koma から貸与された本がある。鉱山局（1876年では鉱山寮だが）から貸与の本はない。そのあと，和漢書があるが，和漢書の中は項目に分けられてはいない。

1876年11月の Supplementaray Catalogue は，増加分の目録のようで，すべて洋書。そしてすべて General Library（この言葉はない）のもののようである。contents はないが，なかは Civil Engineering, Architecture というように項目に分けられている。個々の記載の仕方は同じである。

ところで，以上に述べてきた書籍目録の発行は，ことによると，博物局（博物場）の目録の発行と連動したものであったかもしれない。工部省年報の，明治8年には書籍器械がほぼ備わったという記述はすでに紹介したが，明治8年と9年の『学課並諸規則』の博物局の部分には，同じ文章で，

但シ校中各課ニ要スル各般ノ摸形ヲ収集シテ署ホ備レリ故ニ今年ヲ出スシテ其目録ヲ刊行スヘシ

とある。そして実際に刊行され，[139] 明治10～15年の『学課並諸規則』の博物場の「本邦製造物」のところには，

場中陳列品ノ目録ハ既ニ刊行セリ就テ見ルヘシ

さらに明治16～18年の『学課並諸規則』の博物場の部分では，「場中ノ陳列品ハ別ニ区分目録ノ詳細ナルモノアリト雖トモ」[140] として，陳列品の概略を記している。こうした博物局（博物場）の目録発行のことが，書房の書籍目録発行と全く無関係であったとはいえないだろうと思われる。

さて，工学寮・工部大学校の旧蔵書には，蔵書であることを示す印が押され，蔵書票が貼付されているので，次にそれについて述べることにする。[141] これらの印と蔵書票は，一部が，『改訂増補　内閣文庫蔵書印譜』（国立公文書館　昭和56年）のなかに収録されている。

蔵書に押されている印にはすくなくとも次の6点がある。（縦書きで，斜線のところで行が変わる）。

大・中型，正方形

(1)「工学／寮印」縦3.3cm×横3.3cm

(2)「工学寮／図書印」縦6.4cm×横6.4cm

(3)「工部大学／図書之印」縦6.3cm×横6.3cm

小型，長方形（縦長）

(4)「工学寮」縦3.0cm×横1.3cm

(5)「工学寮図書印」縦2.4cm×横0.8cm

(6)「工部大学校図書」縦2.4cm×横0.8cm

(1)～(3)の印は標題紙に押されている。これをここで大・中型としたのは，(4)～(6)と比較してで，便宜上このようにいうことにした。

以上のうち(1)(3)(6)の3点の印影が『改訂増補　内閣文庫蔵書印譜』に収録されている。[142]

蔵書票にはすくなくとも次の7種類がある。この7種類の区別は，図柄や印刷された文字・印刷された部分の大きさの相違によるものである。蔵書票の用紙全体の大きさは不揃いの場合が多いが，参考のために一例づつ示すことにする。貼られている位置は，表紙うらの中央あたりで，蔵書票はどれもすこし横長の四角形をしている。

(1)「LIBRARY / OF THE / IMPERIAL COLLEGE OF ENGINEERING, /TOKEI,」
枠の線などはない。用紙の大きさの一例，縦7.5cm×横9.9 cm。

(2) "OF" のあとに "THE" がなく，"TOKEI"のあとがピリオドになっている以外は(1)と全く同じ。やはり枠の線などはない。用紙の大きさの一例，縦6.4cm×横9.5 cm。

(3)「THE LIBRARY. / IMPERIAL COLLEGE / OF / ENGINEERING / TOKEI.」
縄目模様的な枠線があり，枠線の外辺の大きさは，縦5.3cm×横8.4cm。用紙の大きさの一例，縦6.6cm×横9.5cm。

(4)「工部大学校書房 / LIBRARY / OF / IMPERIAL COLLEGE OF ENGINEERING, / TOKEI.」
蔓草模様の枠線があり，模様中央の線による四角形は，縦4.8cm×横6.2cm。用紙の大きさの一例，縦6.8cm×横7.6cm。

(5) (4)と同じ図柄だが，サイズがすこし大きい。模様中央の線による四角形は，縦5.2cm×横7.5cm。用紙の大きさの一例，縦6.8cm×横8.7cm。

(6) (4)(5) と同じ図柄だが，"TOKEI" の部分が "TOKIO" になっている。それ以外は (4)(5) と同じなので，注意しないと分からない。大きさは模様中央の線による四角形が，縦4.8cm×横6.2cm。用紙の大きさの一例，縦6.6cm×横7.8cm。

(7) (6)と同じ図柄で，やはり "TOKIO" になっている。大きさが(6)よりすこし大きい。模様中央の線による四角形が，縦5.2cm×横7.5cm (あるいは横7.6cm)。用紙の大きさの一例，縦7.2cm×横9.0cm。

蔵書票は大まかにいえば，(1)(2)/(3)/(4)～(7)，の3種類のわけであり，(4)～(7)については，(4)(5) が TOKEI，(6)(7) が TOKIO，印刷部分の大きさで (4)と(6)，(5)と(7)がそれぞれ対応するいうことになる。

以上の蔵書票のうち，(1)(2)および(4)～(7)には，右下に，"Case"，さらにその下の段に"Shelf" と印刷されている。"Case""Shelf" の右には，それぞれ文字を記すための空欄と，文字を記す場所を示すためのアンダーラインがある。"Case" の右の欄には，大文字のアルファベットが1字か2字，赤のスタンプインクで押されているものが多くあるが，空欄のものも多い。"Shelf"はどれもすべて空欄のままである。"Case" にある文字としては，たとえばG，H，I，U，Y，Z，AC，AH，BO，ERといったものがある。

(3)には "Case""Shelf" の印刷はないが，ちょうどその位置にあたる右下に，他の蔵書票と同じ赤のスタンプインクのアルファベットが押されている。

Case にアルファベットのある本について，1880年の書籍目録にあたってみると，G，H，I のある本は表8の2番目の "Mechanical Engineering" のところに，U のある本は17番目の"Theoretical and Applied Mechanics"のところに，Y のある本は18番目の"Mathematics" のところにそれぞれ見つかる。またERのある本は大型本で "Mechanical Engineering" のところに見つかる。(いずれも複数の本についてそのようになっている)。雑誌 "The Engineer" (大型)の，工学寮・工部大学校旧蔵の部分はVol. 1 (1856年) から揃って現在まで残っているが，Case の文字は古い方から順次EB, EC, ED, EEとなっている。やはり大型の雑誌 "Iron" はEGになっている。

『改訂増補　内閣文庫蔵書印譜』は，上の蔵書票のうち(4)(5)(7)の3点を掲載し，[143] それらの蔵書票が「当時としては珍しい例」であるといっている。[144]

蔵書票とともに，調査用図書・参考用図書の何かの類別を示すと思われる

"Gen. Library. / NoI."
"Gen. Library. / NoII."
"Gen. Library. / NoIII."
"Gen. Library. / NoV."

と印刷された方形の用紙が，どれか1枚貼られているものが多く見られる。しかしないものもある。貼られた位置は，表紙うらの右上かどか，蔵書票の用紙の上辺に接した左右の中央あたりのどちらかのようである。また，東京大学教養学部図書館所蔵の旧第一高等学校蔵書のなかにある，工学寮・工部大学校旧蔵書の和装本の『国史略』『日本外史』には，表紙うらか裏表紙うらに蔵書票とともに，

"Class Library. / No.　"
"Japanese Class / Library. / No　"

の用紙が貼られている。No の右は空欄と下線があり，手書きの数字が書かれている。

以上の他に工部大学校機械科の卒業論文をみてみるとその表紙うらに

「此書籍ハ房外ニ携持スル / ヲ許サス / This book is not allowed to take / out of the Library.」

と印刷された紙が貼られているものがある。文字の向きは和英で異なり，この用紙は和文でみれば縦長，英文で

みれば横長になる。文字の四周は，内側を直線の枠線，そのすぐ外を波線，さらにその外を蔓草模様で囲んでいる。蔓草模様の（和文でみた）上辺中央途中に「工部」，下辺中央途中に「大学」，右辺中央途中に「書」，左辺中央途中に「房」と印刷されている。

なお，工学寮・工部大学校の旧蔵書のその後については後に述べていく。

注

78）本稿では『学課並諸規則』の書房の部分によることを原則とし，一部を“Calendar”の Library の部分によって補足する。

79）『旧工部大学校史料』p. 90

80）『工部大学校第2年報』p. 13

81）『旧工部大学校史料附録』p. 108。『工部大学校昔噺』p. 26—27

82）p. 115。なお，本稿では，引用文の𛀁，𛀀，ㄱは，トキ，トモ，コトに改めてある。

83）第2面。注42の『新聞集成明治編年史』第3巻（再版），p. 364。および，『明治ニュース事典』第2巻，p. 228

84）『文部省第8年報』（明治13年）p. 48

85）『文部省第9年報』（明治14年）p. 57。『文部省第10年報』（明治15年）p. 56

86）ここでは寺岡寿一編『明治初期の官員録・職員録』（全6冊，寺岡書房，昭和51～56年）に収録されたものと，国立公文書館所蔵（公文書の方）の「職員録」を参照した。

87）永井威三郎『風樹の年輪』俳句研究社，昭和43年，p. 80—81。後藤純郎「東京書籍館の創立」，『現代の図書館』Vol. 13 No. 2，1975年，p. 75—76

88）『旧工部大学校史料附録』p. 76—77

89）p. 73

90）『工学叢誌』第21巻（明治16年7月）附録（『工学叢誌』複製版による）。明治15年10月現在の「工学会員姓名録」には猪俣・荒尾とも載っていない（東京大学総合図書館所蔵の『工学叢誌』第1～14巻を1冊に合冊製本したのの巻末にある）。明治25年12月の『工学会々員名簿』には荒尾はあるが猪俣はない（国立国会図書館で単行書として所蔵）。

91）荒尾は明治13年度までは理学科助手だったが，14・15年度は，理学場担当と生徒取締を兼ね，16年度以降は学生課生徒取締になっている。帝国大学になってからは工科大学舎監になり（明治19年10月～24年8月），その後も工科大学に書記として勤めている。以上の確認は猪俣と同じ方法による。

92）注86の『明治初期の官員録・職員録』収録のもの。

93）正しくはこの日本語の名称は途中からのものである。英語の名称はずっと本文の通りだが，日本語の名称は，明治16～18年については本文の通り教頭附書記補，明治15年は書記生補になっている。明治14年（1881）の Assistant Secretary に対応する日本語は『学課並諸規則』では（未見のため）知ることができない。

94）注86の『明治初期の官員録・職員録』第6巻所収の明治19年7月改正のもの。p. 360

95）『東京帝国大学一覧』の「東京帝国大学旧職員」，たとえば昭和15年度版ならp. 472。『東京大学百年史・部局史4』では明治24年5月までになっている（p. 1106）。『帝国大学第2年報』（明治20年）では12月14日に舎監に任じられており，免じられたのは『帝国大学第6年報』（明治24年）では10月21日になっている。

96）『東京大学百年史・部局篇「附属図書館」稿』p. 114。『東京大学百年史・部局史4』p. 1246—1247

97）『帝国大学一覧』の「明治21／22年」p. 20，「明治22／23年」p. 21

98）『東京帝国大学学術大観　総説・文学部』p. 131

99）『図書館雑誌』第36年第3号　昭和17年3月，p. 185

100）高野彰「帝国大学図書館史（2）」『図書館界』Vol. 29 No. 4　1977，p. 159

101）同上　p. 160

102）p. 34

103）p. 16

104）p. 20

105）横浜の部　p. 2

106）『旧工部大学校史料附録』p. 76

107）『日本郵船株式会社五十年史』昭和10年，p. 772。横浜支店長の前は中国の上海支店長を明治30年4月から明治33年2月までしていた（p. 775）。注87の『風樹の年輪』ならp. 196，233，255

108）『日本紳士録』第14版（明治43年）は，単に会社員でなく日本郵船会社員になっている（横浜の部，p. 2）。

109）三谷博「明治後半期における東京帝国大学と社会移動（上）」の第1図「法科大学と医科大学における卒業生の族籍構成の変遷」による。『東京大学史紀要』第1号，昭和53年，p. 26

110）山崎俊雄『技術史』，東洋経済新報社，昭和36年，p. 33。なお，『大日本博士録，第5巻・工学博士之部』は，井関九郎監修，発展社，昭和5年。

111）「工部大学校年報」（明治18年），『文部省第13年報附録』（明治18年），p. 471

112）『工部大学校第2年報』p. 174—175

113）『工部省第3回年報』

114）『工部省第4回年報』

115）『工部省第3回年報』

116）『工部省第4回年報』

117）『旧工部大学校史料』p. 137「工部省沿革報告」p. 347

118）注86の国立公文書館所蔵（公文書の方）のもの。

119）『明治文学全集　4』筑摩書房，昭和44年，p. 186

120）『文部省第3年報』（明治8年）所載のものによる（p. 541—542）。『東京帝国大学学術大観　総説・文学部』にも引用されている（p. 153）。

121)『旧工部大学校史料』p. 90
122)『東京大学百年史・資料1』p. 79。『旧工部大学校史料』p. 55
123)磯野直秀『モースその日その日』有隣堂, 1987, p. 153, 332
124)『明治文学全集 49』筑摩書房, 昭和43年, p. 15
125)p. 178—179
126)『文部省第13年報附録』(明治18年) p. 472—473
127)p. 178
128)『工部省第3回年報』(自明治10年7月至同11年6月)
129)p. 124
130)p. 39とp. 11
131)東京図書館と帝国図書館の洋書目録には,「工部大学校書房書籍目録」という和文のタイトルも出ている。表紙と標題紙の和英の記載の関係は1880年の目録と同じではないかと思われる。
132)『工部大学校第2年報』p. 179—180の間。
133)工部大学校の機械科の卒業論文のタイトルは出水力「日本の機械工学の開拓者・井口在屋（I）」に出ている(『技術と文明』第1巻1号, 1985年, p. 65)。しかし工部大学校機械科の全卒業生のうち, 第1, 2回卒業のなかの4名のものが空欄になっているので, 補足のためここに記させていただくことにする（1880年の書籍目録にも出ている)。

高山直質　Iron Manufacture.
三好晋六郎　Locomotive Engines.
市川（宮崎）航次　Marine Engines.
佐立次郎　Marine Engines.

なお, 東大機械工学科の, 工部大学校から明治・大正にわたる卒業論文の内容についての簡単な変遷が, 北郷薫「東京大学機械工学科における教育の変遷」に述べられている(『日本機械学会誌』, 第81巻710号, 1978年1月, p. 68)
134)鹽原又策編・発行『高峰博士』大正15年, p. 17—18
135)大植四郎編『明治過去帳・物故人名辞典』東京美術, 昭和46年, p. 1211. 富田仁編『海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ, 1985年, p. 264.
136)p. 696
137)p. 679
138)p. 254
139)目録の実物は未見だが, 東京大学総合図書館のカード目録に「工部大学校博物處／日本物産及器械類目録」のカードがある。
140)これは明治16年のもの。字句の微細な相違にすぎないが, 17年と18年は「詳細ノ区分目録アリト雖トモ」である。
141)以下に述べる, 蔵書に押されている印と蔵書票は, おもに東大機械系図書室にある工学寮・工部大学校の旧蔵書の洋書によっている。
142)p. 141, 144
143)p. 145
144)p. 144